

西村高宏著

『震災に臨む 被災地での〈哲学対話〉の記録』

大阪大学出版会、2023 年、
350 頁、2,500 円（税別）

震災を言葉にする。

きっとそんなときには、言葉にならない時間がある。考えようとしていたのに、意気を削がれることもあれば、小さな出来事に励まされたはずなのに、いったいあのときに生まれた勇気はどこにいつってしまったのだろうか、と訝しがりながら佇むこともあるだろう。

『震災に臨む』と銘打たれた著書の、西村さんの言葉を辿っていくとき、私たちはついつい、言い切られた言葉と、言い切れずに続いていく言葉との間に、長い、長い逡巡の時間があつたのだろうと推察することになる。また、その逡巡の時間が、生々しい言葉によって中断されているさまを覗き込むことにもなる。

いまここから逃げてしまったら、戻ってきたときになにも言えなくなってしまう (p. 123)。

いま、ここ。この場所から逃げてしまったら、当事者ではなくなってしまう。いつか、この場所に戻ってきたとき、言葉は失われ、何も言えなくなってしまう。そのことを、私たちはどこかで恐れている。この発言は、震災の渦中から漏れ出た

言葉だった。震災についての哲学対話を続け、記録をつけていくことは、きっと「逃げてしまった」ことでも「逃げなかった」ことでもない。当事者である／ない、逃げる／逃げない、そういう、どこからともなく聴こえてくる声に抗い続けることだったのだろう。

震災についての哲学対話の場、せんだいメディアテークに人々が集い始めたとき、まず露わになったのは、やはり「言葉にならないこと」だった。

……参加者の方々が〈被災〉のなかをどう生き、またさまざまに割り切れなさのなかをどうやり過ごしてきたか、そのつらさやしんどさが、集まった方々の居住まい佇まいのうちから嫌というほど滲み出ていた (p. 13)。

割り切れないこと、つらいこと、しんどいこと。わたしたちが語ろうとするとき、そこには語らなかつた時間がある。語らなかつた時間に、ひとりで考えていたことたちが、振る舞い、居住まい、佇まいによって語られてしまうということが、確かにある。

そして、その微妙なせめぎあいの時間の後に、何かが言葉にされてゆく時間が訪れる。対話の場にいなかった私たちは、対話の痕跡のいくつかの事柄から、話されたり、聴かれたり、はたまた、その場で話されなかつたり、聴かれなかつたりした言葉たちを、頭に描こうとするのだろう。

その場に集った人たちの前に置かれた、いくつかの黒板に、そこで話された言葉をつなぎとめるようにして、白いチョークの文字が書きとめられている。せんだいメディアテークの印象的な写真の中に、丁寧な白い文字が、痕跡となって残され

ている。

家族のこと、うとましく思う

語るに 語れない

被害の重い／軽い

負い目 悪いことだけ？

日常の死 地震による死 比較できないはず

白線で囲われたり、矢印で指示されたり、傍点をふられたりしている言葉たちを目にするとき、割り切れなかったことを、ある〈かたち〉にして割り切ろうとする努力を見ることになる。

視覚化された言葉から、様々な言葉にされた場面を思い描くこともできる。ひとつだけ言えるのは、わかりやすい言葉や、一直線に復興へと進んでいくイメージからは遠く、いま、そこにある現実を言葉にする場面が描かれることだろう。家族の絆を確認するよりも、その距離感が問題になる。言葉にできることではなく、言葉にできないことが問題になる。災害の傷の軽重が問題になる。負い目を感じることのすべてが悪なのかが問題になる。そして、震災による死だけが、なぜ特別視されるのかが問題になる。

哲学対話に居合わせた人たちの発言もまた、記録されている。

……母だけが酷い目に遭ったという事実がどうも家族のなかで妙な隔たりを生んでいて…… (p. 41)。

家族の中でも、被害の軽重には差がある。そこから生まれる微妙な関係性が、隔たりとして語られる。当たり前の差異のようにも見えるが、世間

ではそのように語ってはいけない空気のようなものがある。

……そういった境遇に見舞われた者たちを巷では被災の〈当事者〉や〈被災者〉などと一括りにして語りがちです。わたしは、そもそもそのこと自体に大きな違和感を感じます (p. 28)。

見えない空気はどこにでもある。被災の当事者や被害者として、ひとくくりにしてしまうことで本当は言葉にしたかったものが空中分解し、語られなくなる。しかし少なくとも哲学対話の場では、その違和感が言葉にされている。

ここに、哲学対話でしか、実現できない場所がある。そこではきっと、経験されたことが再構成され、単に癒されることとは異なった、思考の効果が生まれていく。その効果はもしかしたら、その場にいた人たちにとっても、いつになっても見えないままなのかもしれない。しかし、それでもその場で起こったことは、選ぴとられた思考として、記憶されていく。

哲学対話の実践の記録と並行するようにして「哲学」を専門とする人のアイデンティティの揺らぎが、次のような言葉で記されている。

当時、芸術や文学、哲学や思想、さらには音楽活動をしている方々から、「自分たちのやっていること（芸術など）は被災地の方々には何の役にも立たないのではないか」などといった、自身の専門性に因る〈負い目〉や〈戸惑い〉の声を耳にする機会も多かった (p. 7)。

「哲学」は、震災という現実に対して力を持たない。それに対しては、こんな風に言える。

……「哲学」こそが、そのようなわたしたちの苛立ちと、その貧相な判断基準からくる〈負い目〉の根っこをゆっくりと時間をかけてほぐしていける視点と時間軸とを兼ね備えた重要な切り口となるのではないか…… (pp. 59-60)。

「哲学」の価値は、役にたつ／役に立たないという判断基準をゆっくりと時間をかけて、変えていくことにある。哲学には、臨床哲学には、価値がある。

何かを引き受けて、語り始めるためには、とても長い時間がかかる。「哲学」と「臨床哲学」について語ることも、きっと長い時間がかかる。

私自身は、教育「現場」なるものに関わって、哲学対話を実践し、気がついたら長い時間が経っていた。しかし、その間に、誰かから「哲学」や「臨床哲学」が問われることはなかったように思う。問われることは、考えをつめよられるということでもある。考えを求められるから、私たちは表現し、そのことを誰かと話そうとする。哲学を実践する意味などないだろうと、つめよることは、地道な対話の作業をまるごと否定してしまうような、そういう行為なのだろう。

この社会の中で、枠組みに入りきらない、放り出され続けるものに「対話」という名前をつけてみたとして、その価値を引き受け続けることにはどのような意味があるのだろうか？

そのことを改めて、考えてみようとするとき、

震災に取り組んだ西村さんの姿勢の中から、確かに私たちはさまざまなことを学ぶことができる。ある価値を信じること、信じた価値を手放さないこと、自分の生きる現実から離れないこと、そして、それでも未曾有の事態の渦中にあつたとしても、哲学者であること、臨床哲学を学んだこと、それらのことを手放さずに、それでも生き続け、語り、聴き続けること。

そんなことが実際に可能であるというその事実を、私は確かに受け取ったように思う。

中川雅道 (神戸大学附属中等教育学校)